

ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展 2026

～上映映画2作品 [7月26日(日)午後1時30分～] のご紹介～

「ビキニの海は忘れない」(62分)

～放射能はゆっくりと多くの犠牲者を生む～

1990(平成2)年制作。1954(昭和29)年3月1日のビキニ水爆実験に係る日本での真相を追った映画。ビキニ核実験は長い間、被災したのは第五福竜丸、そして久保山愛吉さんの死を通じて核の恐ろしさが語り継がれてきた。しかし、1980年代半ばから高知県の高校生たちの手により、その実相はそれに止まらず実は約1千隻もの日本の漁船が被爆し、数千名～2万人の乗組員が被爆していたことが明らかになった。

その高校生たちとは「足もとから青春と平和を考えよう」を合言葉に、地元の歴史を掘り返し、歴史といまを繋ぎ、自らの生き方を考えようとする「幡多高校生ゼミナール」。彼らの活動で、次々と明るみになるビキニ実験の真実…長崎・ビキニと二重被爆した青年、教育実習で放射能雨を浴びた室戸水産高生の突然死。乗組員には箆口令が敷かれ、当時米国の統治下にあった沖縄の漁民にも水爆実験の目撃者が…。

ナレーションは長く休暇を取っていた吉永小百合の復帰第1作。監督は映画第1作となる森康行。この事実を是非知ってもらおうと結集したスタッフによって作られた。キネマ旬報文化映画ベストテン第10位。日本映画復興会議奨励賞。

「医師中村哲の仕事・働くということ」(47分)

～働くとは何か、国際貢献とは…そして平和とは～

1984(昭和59)年に医療支援を始め、用水路建設、農村復興へ活動を広げた中村哲医師。その歩みはアフガニスタンとパキスタンで35年にも及んだ。

中村医師はまず現地の言葉を覚え、現地の人々との対話を通じ、信頼を重ねてゆく。用水路建設では自ら設計図を引き、重機を運転し、現地の人々と泥にまみれて一緒に作業する。その作業には貧しさからタリバンに参加していた農民も、銃を鍬に持ち替えて参加した。その後、荒れ果てた大地は蘇り。農作物が実り、65万人の生活を支えている。親子で収穫し、家族で食事をする風景は眩しい。

中村医師は言う。「己が何のために生きているかと問うことは徒労である。人は人のために働いて支え合い、人のために死ぬ。結局はそれ以上でも、それ以下でもない。これは人間の仕事である」と。

ナレーションは室井滋、朗読は塚本晋也。写真・映像提供はペシャワール会。監督は中村医師を21年間取材した日本電波ニュース社のカメラマンの谷津賢二。本作は中村医師の「働くこと」「仕事観」に焦点を当てて製作したことが特徴。